

佐伯理一郎とその『日誌拔萃』

長門谷 洋 治

佐伯理一郎（一八六二—一九五三、以下佐伯）は『日誌拔萃』（以下拔萃）を遺した。この拔萃については、昭和四十七年の本学会総会で、阿知波五郎氏により、その留学期

（一八八六—九一）を中心に報告がなされている。阿知波氏は佐伯の生前に本拔萃や両親あての書簡などを閲覧・複写する機会を得、すべてを読破されその全容を発表される予定であったが、病気になるため、公式の発表は上記のみとなった。阿知波氏ご逝去のち未亡人から拔萃を含む佐伯資料全部を小生に提供いただいた。しかし怠惰・非力の身、無為に数年を過したが、最近になって北垣宗治氏（同志社大学文学部教授）のご助力を得て拔萃の一部に触れることができた。もっとも本拔萃を典拠の一として、佐伯について記された先人に阿知波氏の他に松崎八重氏（昭和四十六年）指宿照久氏（昭和五十五年）があり、本稿も

これらに負うところ少なしとしない。

『日誌拔萃』は毛筆による自筆で、出生より六十五歳まで、途中数年間の中断があるが、毎年の主要事項を列記したもので年譜的な性格をもっている。北垣氏は本年譜について「子供たちに対し父はこういう経歴を経てきたということを示す覚え書であろう」とされる。なお元となった日誌の原文もあるのであるが、これはお見せにならないかったのではないかと推察する。

佐伯は、文久二年三月五日熊本県阿蘇郡一の宮町大字宮地に生まれ、明治十一年熊本県熊本医学校に入学して、同十五年卒業するが、同十四年末には医術開業試験に合格している。医籍登録番号三九九一号。卒業証書に長田重雄、小山哉、椋田登、弘田長、濱田支達、古賀保高らが名を連ねているが、このうち濱田は同じ熊本県出身者であるというだけでなく、専攻も同じ産婦人科（東大教授→濱田病院院長）であったことでもあるのであろう、その後も緊密な関係があった。また同じく熊本県出身の北里柴三郎とも生涯を通じて交流があった。医学校卒業後上京、ここでキリスト教に惹かれ、同十七年二月には在京中の新島襄の説教をき

いている。のち佐伯は同志社と関係をもつにいたるが、その最初の接点がここにある。その前、内村鑑三とも親交をもつが、同年三月には小崎弘道（彼も熊本県出身である）から受洗している。そして英語を学ぶこと、海軍に入ることを決し、同年十月海軍軍医補に任じられ、翌十九年には東京海軍病院配置になる。同年米人医師ホイットニー・ウィリス Norton Whitney の助言もあって米國留学を希望するが、

これが認められ、同年十月在官のまま米國に出発する。ペンシルベニア大学医学部の聴講生となるが、同二十一年には卒業試験を受け、学位（MD）記を受けるが、この中にはウイリアム・オスラーも教授としてサインしている。その後ドイツに渡って産婦人科の研修を行い、フランス・イギリスを経て、四年五カ月ぶりに同二十四年四月帰国する。彼の留学は海軍軍医学校に婦人科を設けることにあったが、結局その計画は流れたため退官の自由が与えられた。同二十七年、日清戦争のさい召集を受けるが翌年にはこれを解かれ、これ以外には軍務に服することはなかった。彼はその経歴・人脈からしてアカデミーに就くことは難かしいことではなかったと思われる。しかしあえてその

道をとらず、その後を野に過した。そして第二の故郷として選んだ地が京都市である。明治二十四年五月「ドクトル・ベリー（注 John C. Berry 宣教医）ト同志社病院ニテ働ク事ヲ約束ス 二十日」と記すのが、同志社に關与するはじめだが、両者の仲介をなしたのは当時の同志社社長・京都看病婦学校（注 同志社病院はその実習病院）校長の小崎弘道であった。しかし当初より正規職員であったわけがなく、英文年報では Visiting Surgeon and Gynecologist（注 客員）となっている。そして彼は同年、四条油小路東傘鉾町で開業し、開業医としての第一歩を印している。その後場所は変るが終生産婦人科医として、そして前述同志社との關連（同志社ではアメリカン・ボードとの關係から明治三十年には實質的に看病婦学校・病院の管理を佐伯に移し、同三十九年にすべてが佐伯の手に移った）から看護婦・助産婦教育者としての誠実な日々を送った。この間、同じ熊本県出身の産婦人科医である福田令寿が京都市で開業（のち熊本に戻る）したこともある。福田はエジンバラ大学の出身だが、エジンバラへ出発のさいに佐伯から紹介状をもらっている。佐伯は大阪の緒方正清とともに

日本医史学雑誌
第2号 (4)

に、関西における民間産婦人科医の双壁をなし、学会に寄与するところまた大であった。彼は医史学に強い関心を示し、佐伯コレクションともいふべき広範な医学史関係史料を集めた。彼の妻は、新島を支援した奈良の山林王、土倉庄三郎の娘で同志社女学校の出身であった。九人の子供をもうけた。

本稿を記すにあたり阿知波良子、北垣宗治、指宿照久、坂上俊之の各氏に学恩を受けた。謝意を表します。

(大阪府豊中市)

東博銅人形の製作者および年代に

ついて—幕府医官山崎氏の事跡—

小曾戸 洋

東京国立博物館に所蔵される針灸銅人形は、周知のとおり日中伝統医学史上つとに注目される貴重な文化財であるが、その製作地と時代については、中国明代説、日本江戸時代(十七世紀)説、あるいは北宋天聖の原像とみるむきすらあり、これまで一定の見解を得ない。またその来歴についても異説がある。

演者は最近、幕府医官山崎氏の事跡を調査中、はからずも山崎次善の墓碑銘のうちに、この銅人形製作の謎を解くべき重要な手がかりがあることに気づいた。これは従来諸説を一新するに足る資料と考えられるので、以下に報告し考察する。

幕府医官山崎氏に関する記録は、管見では『寛政諸家譜』『日本医譜』『多紀氏の事蹟』中にみえる程度で、医史